

ま え が き

先進国ばかりではなく、高齢化にともなう諸問題に対して世界的に関心が高まっている。本書で取り上げるアジア、アフリカ、ラテンアメリカの新興国においても高齢化は着実に進行し、高齢者の生活保障に関してさまざまな政策が採用されている。本書は、新興諸国における高齢化の状況とそれに関する諸政策に焦点を当て、それがいかなる性格のものであるのかを考察することを主題としている。

高齢者に対する関心が高まるにつれて、高齢化に関する諸事項に焦点を当てて研究しようとする老年学という学問が出現した。当初、老年学は医学的見地からの視点が多かったが、やがて社会との関係で高齢化を把握しようとする「社会老年学」が出現した。その後、活動的で有意義に高齢者が生活できることを目的としたサクセスフル・エイジングという概念が発展し、その研究と実践が進められるようになりつつある。

本書は、こうした社会老年学の主流派の考えに対して、それが社会という名を冠していながらも、最終的に高齢者の問題を個人的問題に帰してしまうのではないか、という危惧を抱いた欧米の学者が提唱する「批判的社会老年学」から示唆を受け、分析枠組みを各筆者が練り上げている。そのため本書は、社会老年学とそれに対する批判として生まれた批判的社会老年学の考えを紹介することから始めている。

批判的社会老年学は、欧米における批判理論を背景にもち、多様な議論を展開しているが、本書ではそのなかの高齢化の政治経済学に注目している。批判的社会老年学の提唱する高齢化の政治経済学も、グローバリゼーションや人種をはじめとした幅広い分野を対象とし、分析手法も社会構築主義や近代化に対する批判的考察など多岐にわたっている。そうした批判的社会老年

学の提唱する高齢化の政治経済学を、新興国における高齢者政策の分析枠組みとして参照しているのが本書の特色である。本書が新興諸国における高齢化の理解と批判的社会老年学への関心を高めるきっかけとなれば、筆者一同にとって幸いである。

最後になるが、本書を書き上げるにあたり開催された研究会に、鄭功成（中国人民大学教授、労働人事学院教授・副院長）氏と María Julieta Oddone（アルゼンチン FLACSO 教授）氏を中国とアルゼンチンからお迎えし、中国とアルゼンチンの高齢化に関する事情についてお話を伺い、本書執筆にあたって多くのヒントを頂いた。ここに心よりの感謝の意を表したい。

2011年2月

編者